

船井情報科学振興財団留学報告書

第八回

Department of Economics, Northwestern University

村上愛

前回の報告書では博論審査委員会の構成を決定しつつあることを書きましたが、8月に博士論文のプロポーザル発表会を無事に終え、現在は執筆に取り組んでいます。ひたすら執筆に集中、と書きたいところですが、この9月より初めての Teaching Assistant(TA)業務をはじめ、研究と教育の両立の難しさに直面しました。

研究と教育の両立が難しいということは今までもほうぼうで聞いていました。例えば、教員になると、授業期間中はまとまった時間がとれないから長期休暇中にまとめて論文を書き上げる、あるいは、特に教職に就職して1年目は授業準備に忙殺されて研究がはかどらない、などなど。博士取得後の就職においては研究能力が主たる評価対象とはいえ、教育経験も少しずつ積んでいかないと将来大変なことになるのだらうとぼんやり考えていました。

アメリカの経済学の博士課程では自分の研究以外に TA（または RA）を務めることが基本的に要求されているため、卒業する前から徐々に研究と教育の両立に慣れることができるようになっていきます。私の所属している Northwestern University の博士課程では卒業要件の一つとして、卒業時まで最低 1 学期間 TA として教育経験を積みなければなりません。実際上は、2 年生以降ほぼ全員の学生が TA をしているのでこの要件が卒業時に問題になることはありません。

どの授業を担当することになるかは、先生方によって調整されます。現在も来学期の授業の調整中ですが以下のような手順でした。まず教員から Google Form を利用して学生にアンケートがきます。来学期 TA が必要となりうる授業の一覧があり、学生が自分の教えた、あるいは教えられる科目をチェックして回答します。現在は世界中に博士の学生がコロナで散らばっている可能性があるため、どの時間帯だと働けないのか答える項目もあります。その後、学生の希望をふまえて先生方が調整し、全員を振り分けます。ここで割り当てられた授業を基本的に担当しなければならないのでいったん決まったあとに学生側から変更を要求することは稀です。

私をはじめ担当したのは経済学を主専攻(major)とする学部生向けのミクロ経済学の授業でした。まず、Northwestern University では学部生向けの経済学部の授業が複数開講されています。そのうち、学部生が主専攻として経済学をおさめたい場合にとらなければならない授業がミクロ、マクロ、計量のそれぞれで存在し、それらのクラスへ優先的に TA を配属するようになっていきます。私は 160 名以上の学部生が履修する授業に 5 人の TA のうちの 1 人として配属されました。

念のためアメリカの学部生の授業の取り方について説明しますが、アメリカの大学の学部生は基本的に 1 つの学部にも所属するということがありません。多くの学生が主専攻(major)1 つ副専攻(minor)1 つをとって卒業している印象があります。主専攻と副専攻の主な違いは、成績を取得した授業のレベルおよび数の違いです。例えば経済学を副専攻にする場合、初歩的な内容の授業群から要件を満たすように成績をとれば副専攻として認定されます。主専攻にしたい場合は、それらの初歩的な内容の授業群を履修した後に難易度の高い授業群も履修しなければなりません。この履修の順番はかなり重要で、難易度の高い授業を履修するためにあらかじめ必修の授業(prerequisite)をきちんと終えていなければ授業登録ができなかったり成績がつかなくなったりします。

幸い私の担当した授業は学部生向けとしては上級レベルのクラスだったため、受講者が皆初級のクラスを修得済みでした。そのため、教える側としては受講生が初歩的な概念を知っていることを前提にして話せるため非常に助かりました。

実際の仕事内容は以下のようなものでした。毎週 3 時間のオフィスアワー、毎週 1 時間の Discussion Section の担当、毎週の宿題の採点、学期中 3 回ある中間試験および授業期間後にある期末試験の採点です。解説の準備や採点などを合わせて毎週 10 から 15 時間を TA としての仕事にさいっていたと思います。Discussion Section では、教員から指定された授業内容に関する問題を解説し受講生からの質問に答えるなどしました。

コロナのため、オフィスアワーや Discussion Section は全て ZOOM 上で行いました。普段であれば白板に板書できる数式や図を ZOOM 上で書きながら説明する必要があり、タッチペンを使って準備したスライドに書き込みながら指導をしました。それだけでなく、宿題の採点、試験も全てオンラインのシステムを使っていました。学生がシステムにアップロードした回答をシステム上で採点し、点数を入力するという方法でした。オンラインシステムのおかげで、例えば、宿題に 5 問あった場合、私は

問題1のみに特化して、授業を受けている人全員分採点するということができました。これにより、各問題を統一的に採点するということが可能になり、また採点する側としても同一の問題だけ採点するので効率的です。紙媒体で提出していると、分割することが難しいので、1人のTAが担当するのは数十人分の回答を5問分採点することになってしまいます。これでは、同じ問題でも採点基準がTAによって異なるということがありえました。テクノロジーのおかげで、受講生にとっても教える側にとってもよりよい採点環境が達成されていたと思います。

1学期間TAを務めた印象として、一番研究に差し障るのはやはり研究時間が削れ、疲れるということでした。週15時間ということは、一日あたり2時間から3時間費やすことになるわけですが、実際にはTA業務の前後に休憩時間もとらないとすぐに研究に切り替えるということではできません。研究の場合、ただ時間をかければ生産性があがるということもなく、良質な集中した時間を確保しなければなりません。特に数学的な証明をするためには、休む時にしっかり休み、集中すべきときに一気に仕上げるということが重要です。そのため（私の場合は）生活リズムから調整しないと、最高のパフォーマンスはなかなかあげられません。ようやくTAの仕事に割く時間と研究にあてる時間のバランス、緩急がつかめてきた気がするので、来学期以降はもう少し今学期より研究時間を充分にとれるのではないかと考えています。